

海外研修学生の受け入れと派遣に関する 看護学科国際交流委員会の活動 — 2018 年度後期と 2019 年度前期の記録

成田 有吾^{1,7)}, 竹内佐智恵^{2,7)}, 船尾 浩貴^{2,7)}, 武田 佳子^{3,7,8)}, 宮田 千春^{4,7)},
大北 真弓^{5,7)}, 水谷真由美^{6,7)}, 小瀬古 隆⁹⁾, 廣畑 静¹⁰⁾

Activities of the International Exchange Committee on accepting short-term international students and sending our students to the partnership universities - Records in late 2018 and early 2019

Yugo NARITA, Sachie TAKEUCHI, Hiroki FUNAO, Yoshiko TAKEDA, Chiharu MIYATA, Mayumi OKITA, Mayumi MIZUTANI, Takashi KOSEKO and Shizu HIROHATA

2018 年前期分までの活動を三重看護学誌 21 巻で報告した(成田 他, 2019). その後, 2018 年度内には, 海外の大学からの来学はなかった. 2019 年度前期には, 提携校のタイ, チェンマイ大学から 7 名, ドイツ, カトリック応用科学大学(フライブルク)から 6 名が本学看護学科を訪問し, 本学科からタイへ 6 名, ドイツへ 11 名が訪問した. また, 1 年間のドイツ留学を終えた 1 名が無事に帰還した. 以下に各大学別に交流の状況を紹介します. 今後の国際交流委員会の活動について記載した.

1. 大学別の交流状況の紹介

1) タイ, チェンマイ大学看護学科 (Faculty of Nursing, Chiang Mai University (CMU)) との交流

(1) さくらサイエンスプランとして CMU からの訪問
本学看護学科は, CMU を提携校として 6 年前から, 相互に 1 週間の研修を重ねてきた. 今年度もさくらサ

イエンスプラン (Sakura-Science-Plan: SSP) の一環 (A. 科学技術体験コース) として, 2019 年 5 月 26 日~6 月 1 日, 「科学技術に基づく医学・看護学教育の大学と地域医療現場の双方での体験」をテーマに, タイ, 王立チェンマイ大学看護学部から, 7 名(学生 6 名と引率教員 1 名)を招聘し, 三重大学医学部看護学科を起点に研修と交流を展開した.

研修生らは, 学内では, 先進科学技術を駆使したシミュレーション機器を用いて多様な学習コースを提供しているスキルズラボ (Mie University Institute of Technical Skill Education: MiT) を訪問し, 解剖実習見学も組み入れて, フィジカル・アセスメントへの効果的な教育を体験した. また, 附属病院看護部の協力のもと, タイとの共同研究を推進している看護師との交流, 院内の先進諸施設を見学した. 学外では, 5 月 28 日, 本学からバスで紀伊半島を南下し, 世界遺産である熊野古道の散策と紀南病院の見学を行った. 紀南病院では, 本学との連携による各種 IT 機器を活用した地域医療

-
- 1) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 実践基礎看護学分野
 - 2) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 成熟期看護学分野 (成人看護学)
 - 3) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 成熟期看護学分野 (がん看護学)
 - 4) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 看護教育学分野 (看護管理学)
 - 5) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 母子看護学分野
 - 6) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 地域看護学分野
 - 7) 三重大学医学部看護学科 国際交流委員会
 - 8) 三重大学医学部医学・看護学教育センター
 - 9) 三重大学医学部附属病院 看護部
 - 10) 組合立 紀南病院 看護部

支援の医学・看護学研修を見学し、東南海地震への対策として、院内・地域における災害医療の取り組みについて、英語による講義を森本真之助医師から受けた。また、2011年9月の紀伊半島大水害で甚大な被害を受けた紀宝町浅里地区を訪問し、地域住民から当時の状況とその後の復興対応を直接聞く機会も得た。

さらに、5月31日（金曜日）、第22回国際福祉健康産業展ウエルフェア2019（名古屋市ポートメッセなど）に参加し、福祉・健康関連機器を見学した。また、同所に近接するJR東海のリニア・鉄道館では日本の鉄道システムの歴史、新幹線等を見学し、タイ、バンコク・チェンマイ間の新幹線構想があること、日本からのシステム提供の構想があること等が、話題に上った。

また、5月29日（日曜日）には、本学学生とともに三重県立博物館を見学し、太田光俊学芸員からの説明を受け、本学学生との議論を行った。

(2) 本学学部生による CMU への研修訪問

2019年9月7日～14日、本学教員の引率の下、学部学生5名（3年生1名、1年生4名）が、CMU看護学部を訪問した。CMU附属病院の病棟や産科施設等を、同時期に訪問中の東邦大学看護学生とともに見学した。また、CMUキャンパス外では、地域拠点病院での実習や精神病院での実習に同行した。CMUにおいて、学生達は、日本の医療の現状や看護教育などをプレゼンテーションの用意をして行ったが、発表には十分な時間がとれなかった。CMU側からも、本交流を通じて学生が英語力を高める機会となったことが伝えられた。

2016年度から始まったCMUとの共同研究；テキストメッセージを用いた妊婦支援では、三重大学側では児玉豊彦講師（当時、現産業医科大学）を中心とした「チーム BEYOND」の活動が継続され、データ収集が完了した。現在、論文投稿に向けて準備中である。

本研修の帰国後、参加学生1名のCampylobacter感染が判明した。十分な注意喚起を行い、当該学生も安易な飲食行動等はなかった。幸い帰国後に発症し、無事に回復した。帰国後1か月経過するもGuillain-Barré症候群等の発症も見られなかった。海外での行動に常に危機管理意識を備えることの重要性を再認識した。

2) ドイツ、フライブルク・私立カトリック応用科学大学との交流

Katholische Hochschule Freiburg (Catholic University of Applied Sciences Freiburg, 以下KHと略)。

(1) フライブルクからの訪問：2019年度前期、6月8日から18日までの間に、同大学から6名（教員4名、

大学院生1名、学部学生1名）が本学を訪問した。同大学との交流提携文書の5年ごとの更新時期にあたり、来訪教員はEdgar Kössler教授（学長）、Cornelia Kricheldorf教授（副学長）、Anne Kellner教授（看護学科長）、Naomi Hiroe-Helbing国際交流センター長で、6月12日に、片山直之教授（本学医学部長）との間で署名文書を交換した。続いて、一行は駒田美弘学長を表敬訪問した。

滞在期間中、Kössler学長は、専門のインクルーシブ教育に関して以下の教育講演を行った。開催日時：6月11日17:00～17:50、場所：看護学科棟の第一講義室、タイトル：“The Special and Inclusive Education Ambulatory of the Catholic University of Applied Sciences in Freiburg - A community-based offer”（フライブルグカトリック大学における地域に根ざした特別支援教育とインクルーシブ教育の取り組み）。座長は同大学との関係性構築に関わり、この領域に造詣の深い須曾野仁志教授（本学大学院教育学研究科）が担当。看護学科に加え、教育学大学院生や学外からの参加者、計26名が聴講した。

滞在期間中、一行は三重県の地域包括ケアを実践する2地区を視察、地域の関係者との意見交換を行った。6月12日、鈴鹿地区では、高齢者向け地域活動「100歳大学」を視察、6月13日、東紀州地区では公立紀南病院を訪問、須崎真病院長から院内と、支援する地域のひとつ紀宝町浅里地区の案内を受けた。浅里地区は5年にわたり三重大学看護学科への海外からの研修生の見学を受け容れており、Kössler学長の訪問を機に、地域が主催する「浅里おもしろ大学」との間での交流提携文書を調えた。その後、一行は、紀南病院職員、地区住民、三重大学教員・学生を交え「飛雪の滝キャンプ場」での懇談で友好を深めた。コテージに宿泊し、翌6月14日三重大学医学部附属病院に移動、外来棟5Fのホールで「地域包括ケア」を主題に、第5回日独パネルディスカッションを下記内容で開催した。

6月14日（金曜日）15:00～17:00

セッション1：“Securing the care in an aging society in Germany”（ドイツの高齢化社会におけるケアの確保）
Kricheldorf C教授（副学長）「Gerontology（老年学の観点）からのドイツの取り組み」

Kellner A教授（看護学科長）「新しく施行された法律に基づいての看護に携わる人たちの職業人教育、ドイツでの取組」

Engler S氏（同大学PhD院生）「遠距離からのケア」
セッション2：“Demand for skilled workers in the care sector”（医療分野における熟練労働者の需要）

Kössler E教授（学長）：「人材不足について、ドイツの現状と対応、外国人の登用など、諸般の問題」

セッション3：日本における高齢化社会への対応

澤田樹里 看護師（三重大学附属病院）、「地域包括ケア」における急性期病院としての大学病院の役割

芝合香織 看護師，主任（公立紀南病院）「地域包括ケア」を念頭に，地域，とくに過疎が進む地域の病院が対応できること，将来展望も含めて

宮田千春 准教授（三重大学大学院医学系研究科看護学専攻）「老健施設での看護，現状と課題」

セッション4：総合討論。座長，水谷真由美 准教授，広江 Helbing 尚美 氏（カトリック応用科学大学国際交流センター長）

今回のパネルディスカッションに計30名が参加した（内訳人数：ドイツ一行6名，看護学専攻教員10名，学部学生3名，大学院学生3名，大学病院関係者4名，外部施設関係者3名，外部個人1名）。

なお，KH（カトリック応用科学大学）の学部学生1名（女性）は他の来訪者より2日早く6月8日（土曜日）に津市へ到着した。委員の一人が，2日間のホームステイを受け容れて，同学生は6月10日（月曜日）に他の一行と合流した。彼女は，世界各国の医療保険制度の比較を研究テーマとしており，日本の医療保険制度や地域包括ケアシステムを理解する上で日本の文化や生活を体験する機会となった。委員宅の一般的な日本の家庭（夫と子ども2人の核家族）を知ってもらい，一方，ホストファミリーは，彼女と一緒に食事をし，カードゲーム等をする中で，両国の生活習慣の違いや最先端の医療技術など多くの話を共有し，有意義な時間を過ごしたと感想を述べた。

2018年9月22日から2019年8月31日までの1年間，KHに留学し，ドイツ語，インクルーシブ教育，国際保健・看護学等に触れた学部学生（2年生）1名が9月1日に無事，帰還した。相互単位認定はないため，2018年10月1日～2019年9月30日を休学として処理，本学との提携に基づき，留学期間中の授業料は免除された。帰国後，第2学年後期に復学した。

(2) 2019年度三重大学学生らによるフライブルク訪問

三重大学関係者9名と紀南病院職員の2名，合計11名が，9月21日～9月29日，フライブルク，KHを訪問した。本学教員が看護学専攻博士後期課程学生1名，学部学生5名（4年生3名，1年生2名）を引率し，本学附属病院職員（看護師）2名と紀南病院職員（看護師）2名が同行して，KH，インクルーシブ教育実践施設，ならびにフライブルク大学医学部附属病院等を見学した。フライブルク大学の附属病院見学にはKH側の格段の配慮があつたのと承知している。過去5年間は，関連施設の見学はあつたものの，今回，初め

てフライブルク大学附属病院を見学することとなった。この訪独研修では，同大学教職員および学生との交流，ならびに現地での発表と意見交換が行われた。また，紀南病院の副看護部長と手術室看護師長が同行したことで，本学職員や学生は現地の見学とともに，さまざまな角度での地域医療の差異を確認する機会となった。さらに，本学と紀南病院との共同研究である過疎地域における地域包括ケア実践への外国人専門職の参画に関するインタビュー調査の一部を実施した。

3) 三重県事業としての英国，ロイヤル・フリー病院への見学

今年度，2019年9月8日（日曜日）から同14日（土曜日）まで，三重県事業（令和元年度三重県看護職員等の海外派遣研修）として武田委員が英国，ロンドン市のロイヤル・フリー病院（Pond Street, London, NW32QG, UK）ほかを見学する機会を得た。こちらの詳細は，別途，三重県からの報告書がある。

2. 今後の国際交流委員会の活動について

現在，本学看護学科が交流している大学は2大学：CMUとKHに過ぎない。交流担当者は当学科の教員のほかにはなく，本務に加重するかたちでの活動では2校でもなかなか大変である。しかし，5年を超える重層的な交流が良好な信頼関係を形成してきた。さらに，国際交流には資金確保が重要である。今回，本学国際交流事業資金を獲得できたこと，SSPを3年連続で獲得できたこと，そして今年度，初めて，当科の活動に日本学生支援機構からの奨学金を得られたことは，来訪学生と渡航学生，双方への貴重な援助となった。さらに，今年度，杉浦地域医療振興財団からの研究資金を得たことで，「地域包括ケア」と外国人専門職の切り口での議論を進めることができている。非常に多様な業務の中ではあるが，さまざまな形で発信できる素材，つまり，研究の俎上に載せられる素材を求めての交流が期待される。活発な国際交流は，本学への入学を志願する受験生にとって判断材料のひとつでもある。提携校との交流の継続，さらに，機会があれば，あらたな提携校の開拓が期待される。関係者全体の相互理解と協力体制，英語能力の向上，研究マインドでの取り組みはますます重要である。

謝辞

SSPに対してのご支援とご指示をいただいた国立研究開発法人科学技術振興機構中国総合研究交流セン

ター日本・アジア青少年サイエンス交流事業の関係各位、日本学生支援機構、杉浦地域医療振興財団ならびに三重大学での経理、報告書等にご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

また、本学とドイツ、フライブルク、カトリック応用科学大学への相互訪問、本学学生の1年間の留学では、ドイツ学術交流会（Der Deutsche Akademische Austauschdienst : DAAD）よりご支援をいただきました。申請と交付にあたりご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

利益相反

SSP の資金援助を国立研究開発法人科学技術振興機

構から受けた。また、本学国際交流事業支援経費、地域拠点サテライト 東紀州サテライト事業経費ならびに医学部長経費・看護学科長経費から予算に則って資金援助を受けた。杉浦地域医療振興財団からの研究資金（研究代表者；成田有吾）を受けた。他に本報告に関して申告すべき COI はない。

文献

成田有吾, 竹内佐智恵, 船尾浩貴, 武田佳子, 宮田千春, 大北真弓, 水谷真由美, 小瀬古隆, 廣畑静 (2019). 海外研修学生の受け入れに関する国際交流委員会の活動—2017年度後期と2018年度前期の記録. 三重看護学誌. 21: 71-77.